



コスモス

「コスモス」と聞いて皆さん何を連想しますか？ 秋桜のコスモスを連想される方は多いと思いますが、私にとっての「コスモス」は、約30年前にテレビで放映された宇宙を題材にした「コスモス」という科学番組です。私の尊敬する故カール・セーガン（元コーネル大学教授）の著作がテレビ化されたものです。番組タイトルは宇宙を表す Cosmos であり、宇宙の広大さ、相対性理論、自然への畏怖、宗教など様々なテーマについてセーガン博士自らが出演して素人にも実に分かりやすく語りかけてくれた番組でした。当時小学生だった私は、かぶりつきで見っていました。いつか再放送されないかなと思っていて、米国留学中にそのDVDが販売されていることを知り、現地で早速購入しました。かぶりつきアゲインでしたが、今度はセーガン博士の肉声（DVD中ですが）を聞くことができ、感動がよみがえりました。

米国ニューメキシコ州に、この「コスモス」にも登場する国立電波天文台（National Radio Astronomy Observatory, NRAO）があります。留学先のテキサス州からはなんとか車で行ける距離だったので、これは見に行かなきゃいかんと思い、家族で出かけました。そこには超大型干渉電波望遠鏡群があります。電波望遠鏡一つの直径は、およそ野球場のダイヤモンドのサイズだそうで、これが数十個以上ずらりと並んでおり、圧倒されました（写真）。セーガン博士は「コスモス」のような科学を紹介する著作のほか、SF小説「コンタクト」も執筆されています。これが映画化され、NRAOは、地球外生命体の電波信号を受信するという設定で撮影現場となっています。

この「コンタクト」は、科学と宗教について実に考えさせられるものでした（ネタバレ注意）。ジョディ・フォスター演じる主人公の天体物理学者のエリー・アロウェイは、電波望遠鏡群を使って地球外知的生命体からの信号をキャッチし、未知の宇宙船を完成させます。しかし彼女は究極の選択を迫られます。神の存在を信じるか否かを。結局、自分の信じる科学によりその存在を証明することができない神を否定し、その結果、この宇宙船へ

の搭乗の資格を失います。すったもんだあって、結局搭乗はするものの、地球外知的生命体との接触体験は、その存在を公にしたい政府高官によってもみ消されようとしています。しかしエリーは反論ができません。証拠がないからです。それでも自分の体験を信じてもらいたいと願うエリーは、証拠がなくても神を信じてほしい宗教家側の立場を理解するのです。そして、マシュー・マコノヒー演じる神父でエリーの恋人のパーマー・ジョスは、記者団に「エリーの体験を信じますか」と聞かれ、「科学と宗教で立場は違うが、目指すことは同じ。“真理の探求”だ。彼女を信じます。」と答えます。しびれるねえ～と思い、何か特定の神様を信じているわけではない私にとって、科学と宗教の永遠のゴールである“真理の探求”という言葉にとっても納得が이었습니다。1997年公開の映画ですから、随分と古いですが、ご覧になった方と語り合いたいです。

遅くなりましたが、このリレーエッセイのバトンは沼子千弥先生（千葉大学）から引き継ぎました。彼女とは大学の同期で研究室も同じです。執筆打診のお電話を受けた3月は震災直後で、前任校の徳島大学から千葉への引っ越しのスケジュールが定まらず、大変そうでした。私は学生時代に、中井 泉先生（現東京理科大）に連れられ、沼子さんとともに石巻専修大学の太越健嗣先生を訪ねたことがあります。マガキ等の貝類のバイオミネラリゼーションに関する興味深いご研究をご紹介いただき、地元で根差したご研究に感銘を受けました。石巻市は、甚大な被災地の一つです。宇宙を意味するコスモスはギリシャ語の「美しい」や「秩序」が語源で、秋桜のコスモスも秩序正しく整然と並んだ花弁の美しさから名付けられたそうです。コスモスが咲く頃には、石巻はじめ被災地の復興が少しでも進んでいることを心よりお祈りいたします。

今回は学会活動で親しくさせていただいている床波志保先生（大阪府立大）にバトンを渡しました。本誌デビューにこうご期待。

〔愛知工業大学 手嶋紀雄〕



超大型干渉電波望遠鏡群（Very Large Array），ニューメキシコ州ソコロにて筆者撮影